

プロフィール

英オックスフォード大学現代歴史学部科博士後期課程で、日英比較戦災復興史・戦災都市復興計画についての研究を修めた後、研究職を経てコミュニティ開発（カンボジア）に従事。海外実務研修では、UNDP シエラレオネ事務所にて地域保健衛生環境整備を通じたエボラ危機後の社会経済復興事業に携わっています。

1. 平和構築人材育成事業に応募した理由を教えてください。

私の応募動機は、第一に当事業が人材育成を目的としている点、第二に研修のプログラム構成ならびにカリキュラムが自身のニーズに合致していた点、第三に国際機関における実務研修の機会を享受できるという3点にありました。

応募以前、私は歴史研究、とりわけ現代史を中心に第二次世界大戦後のイギリスと日本における戦災復興史をテーマにした比較研究に取り組んでいました。その過程において、これら2か国の復興事業を通して蓄積された知識が、国家・社会的要素ならびに背景要因は異なるにせよ、混乱後の社会復興ならびに平和再構築という枠組みにおいて開発途上国の復興事業に何らかの示唆を与え得るのではないかと考えるようになり、実務者として復興活動の現場に携わることを希望するようになりました。応募当時は、開発分野にキャリア転向後2年目、カンボジア地方部においてNGOに属しコミュニティ開発に携わっていました。このような経緯から、当事業が掲げる人材育成という事業目的は、実務者としての経験が非常に浅く実践的な知識・技術を習得するための専門的支援を必要としていた私にとって大きな動機となりました。

第二に、第一の理由と関連して国内研修のカリキュラムを平和構築・開発分野の知識を体系的、且つ、効率的に学ぶまたとない機会として捉えたことが挙げられます。海外実務研修に先立ち6週間の準備期間を研修という形で確保できることは大変に心強いものでした。

加えて、当事業による国連機関での実務研修への全面的支援は、第三の動機となりました。当事業に応募する以前に国際機関へ応募した際、見通しが定かでない長期間にわたる採用プロセスを経験していたため、派遣までの具体的なタイムラインが提示された当事業の海外実務研修プログラムは非常に有難いものでした。

2. 国内研修に参加した感想は？

国内研修は以下 2 点において私にとって大変に実りのあるものでした。第一に、異なるバックグラウンドを持ちながらも根底に平和構築という共通の問題意識を持つ他の研修員との出会えたことです。多様な専門性と実務経験を有する研修員と共に行う実習、講師陣も交えて繰り広げられる議論の場では、新たな知識・教訓が吸収できたのみならず、これまで自らが持ち得なかった視点から問題事象を捉えられるようになりました。また、他の研修員が実習外の場において共有してくれる知識や経験談は非常に興味深く、浅学ながらほとんど見識を持ち合わせなかった国々の地理文化に触れることができ、改めて平和構築・開発という分野に従事する意欲が掻き立てられました。海外からの研修員は積極的に自国の社会情勢に関する知見を共有してくれ、本分野の実務者を志す者としての自らの覚悟を新たにしてくれました。

第二に、豊富な知識と第一線での実務経験を有する講師陣による講義を短期間で集中的に受けられ、講義後の交流の場においては講義に関するさらなる理解を深められたのみならず、キャリア構築という枠を超えた包括的な示唆を得られたことです。講義では時間的制約のなか各講師陣による見識が加わった膨大な量の知識と情報が提供され、6 週間という期間で平和構築に関する知識を体系的に学べたことは私にとって有難いことでした。さらに講師陣との交流の場は、折に触れて立ち返りたい示唆に富み、今後自らが問題に直面した際の糧を大いに与えてくれるものであったことを有難くまた懐かしく思い返します。

3. 海外実務研修での活動について教えてください。

私の海外実務研修は 2016 年 7 月より国連開発計画（UNDP）シエラレオネ現地事務所で開始されました。Inclusive Growth and Sustainable Development という部署でプログラム専門官として勤務し、主にエボラ危機後の地域保健衛生システムの再構築に関わる事業に携わりました。

2014 年に西アフリカ 3 ヶ国で蔓延したエボラ出血熱（以下「エボラ危機」）は、1990 年代初頭から約 10 年間にわたる内戦終結後、民主的統治と安定への回帰を確実なものにし豊富な農業・鉱業資源をもとに堅調な経済成長を維持していたシエラレオネに甚大な人的・社会経済的被害を及ぼしました。翌年 11 月に流行終息が宣言されるまで感染者は国別で最多の約 1 万 4 千人、死者数は約 4000 人に上り、経済活動の停滞は深刻化し GDP 成長率はマイナス約 21%まで低下、一世帯あたりの家計所得は約 30%も減少しました。エボラ生存者、医療従事者、遺体埋葬ボランティア、感染への恐怖に晒された人々が被った身体的・精神的被害に加え、犠牲者・生存者への社会的偏見、それに伴うコミュニティ間の信頼関係の崩壊といった負の社会的連鎖により国全体の機能が著しく損なわれることとなりました。このような緊急事態から 2 年弱、UNDP シエラレオネでは社会経済の条件再整備支援に取り組んでおり、その一環として人々の保健サービスへのアクセス改善ならびに衛生習慣の向上といった、保健衛生環境整備を通して地域社会の機能回復を図る事業に私は携わることになりました。

私の所属部署ではギニア・ライベリア国境沿いの 2 県を対象にした 3 つの地域保健衛生事業が進行しており、私はそれら事業の一部活動において管理業務を担いました。日々の業務には、事業活動の進捗状況の確認、カウンターパートである保健衛生省・国家 HIV/エイズ局や協同して事業を遂行する WHO・UNICEF・UNDP 他国事務所との調整業務、共通する事業活動に取り組む NGO・国際援助機関・管轄省庁で構成される



テクニカルワーキンググループの会合への出席とそこにおける情報収集・共有、報告書を含めた書類作成業務などが含まれます。所属部署が新規事業資金調達の機会を得た際には事業提案書の作成に関する補助業務なども担いました。

担当した事業活動の一つでは、国家 HIV/エイズ局への技術的支援として HIV/エイズに関連する現行の法制度・政策の運用評価（“Legal Environment Assessment for HIV/AIDS”）に関わりしました。エボラ危機により援助機関の支援がエボラ撲滅・復興支援に集中化したことを背景に、当該地域保健衛生事業では、それ以前より問題視されていた国際保健上の脆弱性を軽減することも事業目的の一つとしており、当該活動はその一環として、HIV/エイズに対する社会的脆弱性に焦点を当てています。HIV 陽性者・エイズ患者ならびにキーポピュレーション（“Key Population”）*の現状とニーズに対して、現行法制度がどの程度対応しているか法律と人権の観点から評価分析することで、脆弱性に係る問題を抽出することが活動実施の直接的な目的です。加えて、法



60 以上の HIV/エイズ関連事業機関・団体を招いて実施したステークホルダーワークショップにおいて活発な議論を繰り広げる参加者

* 注射薬物使用者・性的サービス従事者など感染のリスクにさらされやすく感染制御重点化の対象となる集団に属する人々の総称。

改正や政策立案・人権擁護・当事者の HIV/エイズ対策行政への参画といった分野横断的ガバナンスを強化するための基盤構築の一助となり、医療分野を中心とした従来の HIV/エイズ対策をより包括的なアプローチに発展させることを活動の成果目標としています。

HIV/エイズに関する法整備評価はシエラレオネ国内において初めての試みであったため、事業活動は関連法令・ガイドライン・政策など 1 次資料の収集、テクニカルワーキンググループの結成することから始まりました。法律を専門とするコンサルタントと協同し、国家 HIV/エイズ局ならびにワーキンググループのメンバーと協議を重ね、活動内容の充実化ならびに可能性を追及しながら最終評価報告書の完成まで遂行できたことから達成感をえました。さらに、その過程における情報収集・分析作業において技術的サポートを果たせたことは、自らの専門外分野であってもこれまで培ってきた技能を十分に活用できるという大きな自信につながりました。

4. 海外実務研修での感想は？一番印象に残っていることは？

海外研修は充実した自己研鑽を積めた 1 年であり、数々の貴重な経験と学びの機会に恵まれました。

そのうちの 1 つは国連システムにおける業務遂行上の知識を得ることができたことです。書類作成 1 つ、会議の実施 1 つ、日常業務レベルであっても内部システムにはガイドラインやプロトコルをはじめ様々な規定プロセスが詳細に存在します。これらはオンライン上のデータベースである程度確認できるものの、実地経験を経なければ理解しにくい面が多々あるといえます。このような理由から、赴任後の半年は問題に直面する度に右往左往し、1 つ解決する毎にまた 1 つ知識を増やす、というようなことを繰り返す日々であったように思います。入念な事前準備が直前の予期せぬ事態により徒労に終わる時など、複雑多岐に渡るシステムを悩ましく思ったこともありましたが、今では国連ほどの大きな組織を健全に管理・運営するために必要な仕組みなのだとよく理解できます。

国連の事業管理手法を学ぶことができたというのは前述のとおり非常に貴重な経験でしたが、やはり一番印象に残っているのは、異なる文化を背景とする人々が混在する職場環境と月並みですが人との出会いです。ありとあらゆる場所での豊かな経験と高い専門技能とを併せ持つ百戦錬磨の上司や同僚から、国連組織内外を問わず今後仕事をしていく上で糧となるような示唆を得ました。

そのうちの一つは、自らがリードする立場にある際のミーティングの進行の仕方です。何らかの課題解決のためのミーティングでは、問題の原因追究は省き、ミーティング時間のすべてを問題解決策の検討・構築に割くこと、過去の事象に遡るのではなく、現状に対してどのような

アプローチが可能なのかを最優先にミーティングを前へ前へと押し進めることが時として重要であることを教わりました。これは得てしてミーティング出席者個々人が、生じた問題の原因に対して各々異なった見解と主張を持つため、時間的制約のある中で原因に対する共通認識を形成することが容易でないためです。特筆に値するようなことでないと思われるかもしれませんが、実際ミーティングの場に身を置くと、原因追究のみに時間が費やされ、肝心の解決策に関する話し合いに至らないという状況が往々にして生じており、意識的に議論を前進させることを心がける重要性を強く感じました。異なる国籍・文化・民族背景とそれぞれがそれぞれの主張を持つ人々が集まる場における実践的な問題解決アプローチを示してくれたこのアドバイスは印象に残っていることの一つです。

5. 今後のキャリア・プランを教えてください。

有難くも私は次の半年間、引き続き UNDP シエラレオネ現地事務所で勤務する機会を得て、地域母子保健衛生に関する事業にプロジェクトマネージャーとして携わっています。任期終了後は国際機関を含めた公的セクターと民間セクターを行き来しながら、以前より強い関心を抱いている官民連携事業の専門性を磨いていきたいと思っています。

6. 事業への参加を考えている方にメッセージをお願いします。

本事業が私にもたらしてくれたすべてに心より感謝しています。国連機関に限らずあらゆる組織で働く際に通用するであろう普遍的な教示を得ることができました。キャリア構築という側面においても非常に有益な機会であったと考えています。

国連機関でのキャリア構築を考えている方にとっては、内部システムを学ぶという意味でも、次のキャリアステップにつながる機会の享受という意味でも良いエントリーポイントとなると思います。具体的なキャリアの方向性は定まっていないものの国際機関での勤務に関心があるという方にとっては、1年というのは適当な期間であると思います。派遣先によっては国連ボランティアという立場の性質上、職務内容が詳細まで明確に定まっておらず戸惑うこともあるかもしれませんが、このことは逆に、自分の働きかけ次第で得られるものの可能性をどこまでも広げられるということだと私は思います。新たなキャリアステップとして当事業への参加を是非お勧めいたします。